



TITLE:

丸屋根だより

AUTHOR(S):

天文臺人

CITATION:

天文臺人. 丸屋根だより. 天界 1924, 4(39): 127-127

ISSUE DATE:

1924-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160040>

RIGHT:

丸屋根だより

天文臺人

二月二十日から二十一日にかけて皆既月食があつた。當日二十日の晝間は日が出たり又曇つたりで可なりデラされたが日が落ちる頃には残りなく晴れて先づ幸先宜しき喜こんだものである。其頃からそろ／＼月食觀測乃至觀望の熱心同好者が天文臺に出掛けて來た。大阪からは市岡小學の津田先生、明治小學の春海先生、又神戸から來た人もある云ふ工合で平午は靜かにめぐる時計仕掛けの音のみ鳴り優るのが今夜は月食に先つて先づ各人の意氣が上つた。日が落ちて月の光りがサエて來た時分、又もや層雲が大分深く立ち籠めたので皆々一時は顔をくもらせたが月食の初虧が近づく頃再び晴れて眞如の月を仰いだ。

それで一同喜こんで觀測準備に着手す。即ち中村君は二十五センチ反射望遠鏡にて、自分は十八センチ望遠鏡で月の寫眞を撮る準備をした。而して其頃には大分の人數に達してゐた。人々には豫じめ準備してゐた月面略圖を配布して色々の時刻に於ける影の見取圖を書いて貰ふことにした。――廣庭に出してある十センチ又八センチ望遠鏡等四、五の望遠鏡をかたみ交りに使用し或は雙眼鏡や又肉眼觀測によつて。

而して此等の筋書は皆既になるまで順序よく進んだのであ

るが又々雲が出初めて、生光の頃には全く見えなくなつて仕舞つた。

それでも皆既中には月面が赤銅色を呈したこきや又最後に影に没した部分が他の部分に比してホノ白く見え、しかもそのホノ白い部分が段々西から南をへて東の縁へ推移していつた様子もよく觀望せられた。

すつかり月が雲にかくれて終つたので一同は只一、二名の張り番を残して天文臺の部屋に引き上げストープを取り圍んで大に氣焔を上けた。實に和氣霽々として皆々いゝ氣持になつて終つた。其内に、また月が出かけたに報ぜられたので一同は夫れつゝばかりに外に出た所成程月の邊りが薄ほんやりこして來た。そして再び緊張して月に向つたが最初程の收穫なく只雲のうすらぐ間を利用して寫眞を撮り、スケッチをしたが又々雲飛來して空しく復圓の時刻をすごして終つた。

一同天文臺に引上げて最後の氣焔を上ぐ。

中村君はプロセス乾板を使ひ、自分は中村君が手製で作つてくれたフィルムタアを用ゐて、アイソ・クロマチック乾板をつかつたが何れも皆既前のものは可なりうまく採れた。

月面スケッチは大分集まつたが整理は可なり困難である。即ち望遠鏡を用ゐた時、肉眼のときでは、只にその精確度丈の問題でなく大分様子が違ふものらしい。

附記

大阪市岡第三小學の津田雅之氏から、その指導で、小學生がした月食の月面スケッチを送つて寄越された。大層面白い、且つ教育價値の多い仕事と考へます。

その生徒の名は

高二、女 香川幸子、宮田藤野、澤井ふき子、佐野きみ子